ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.20 No.4 April 2019

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

4

CONTENTS

- 巻頭言
  私たちは何を結ぶのか
  ／高見宇造 1
- 「元初まりの話」に登場する動物たち（39 最終回）
  「元初まりの話」と進化論
  ／佐藤孝則 2
- 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道の様相（28）
  太平洋戦争と北米伝道 ⑥ アメリカ本土での戦後復興
  ／尾上貴行 3
- 日本語教育と海外伝道（9）
  国内での日本語教育と海外での日本語教育 ④
  ／大内泰夫 4
- キルケゴールで読み解く 21 世紀（7）
  サイバー空間における「分身の術」と生身の人間
  ／金子 昭 5
- ライシテと天理教のフランス布教（17）
  ライシテと医療 ②
  ／藤原理人 6
- 伝道と翻訳 ―受容と変容の“はざま”で―（16）
  初期仏教に見る「ことば」の諸相 ⑤
  ／成田道広 7
- コロンビアへの扉 ―ラテンアメリカの価値観と教えの伝播―（3）
  1. ラテンアメリカ基礎知識の話
  ／清水直太郎 8
- コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論（25）
  ベルギー領コンゴの独立 ②
  ／森 洋明 9
- 遺跡からのメッセージ（44）
  文化遺産を今に活かす ⑪ 壮大な横穴式石室をもつ塚穴山古墳
  ／桑原久男 10
- ヴァチカン便り（37）
  法王はアラビアへ
  ／山口英雄 11
- 思案・試案・私案
  児童虐待：映された親と子、そして夫婦
  ／堀内みどり 12
- 図書紹介（111）
  『きりしたん受容史―教えと信仰と実践の諸相―』
  ／金子 昭 13
- おやさと研究所ニュース 14
  2018 年度「教学と現代」報告（金子昭）
  キリスト大学国際会議に参加（堀内みどり）
  ／第 319 回研究報告会（尾上貴行）／『グローカル天理』年間購読のご案内／「出前教学講座」申し込み受付／ 2019 年度公開教学講座の案内

巻頭言

私たちは何を結ぶのか

おやさと研究所長 高見宇造 *Uzo Takami*

学生時代の話で恐縮だが、天理教の原典である「おふでさき」を学び始めたころ、しやハせをよきよふにとてじうぶんにみについてくるこれをたのしめ（二号 42）というお歌の理解に困惑したことがある。「幸せ」が「良くなる」とはどういうことか。本来、「幸せ」は人間にとって良いことではないかと思ったからである。後日、「しあわせ」は「仕合わせ」という表記で、「めぐりあわせ」(『日本国語大辞典 第二版』小学館）の意が第一義であることを知った。さらに転じて「出会い」を意味するようになる。このお歌は「信仰の道に付いてくるならば、様々な出会いや巡り合わせが変わってくる」と理解すればどうだろうか。人はその中で救けられることを教えている。

ところで私は、去る２月 17 日、国際宗教研究所・上智大学グリーフケア研究所（島薗進所長）主催の公開シンポジウム「支え合う、はぐくむ、宗教の力」（会場・上智大学）に出席した。冒頭、主催者から、「宗教」（Religion）の由来は「再び」という接頭辞 re と「結びつける」という ligare であり、「つなぎとめる」「むすびつける」という意味があり、今その本来の力が問われているとの開催挨拶があった。

発題は、池田奈津江氏（弥生神社権禰宜）が「宗教的縁とつながりの創出―東日本大震災の被災地から地域の神社へ―」、ビスカルド篤子氏（カトリック大阪大司教区社会活動センター）が「社会の谷間に置かれた人びととの関わり」、吉水岳彦氏（臨床仏教研究所研究員）が「ご縁をむすんで、支え合い、はぐくみあう―仏教の慈悲と支縁―」等であった。

どの報告も興味深いものであったが、池田氏が東日本大震災被災者を「カテゴライズするのは意味がない。生老病死が全て苦であるわけでなく、喜怒哀楽のある血のかよった人間」であること、そこでは何よりも傾聴が求められ、「お互いが持つ多様な宗教的縁の覚醒と言葉の力が人を結びつける」というお話はとても心に残っている。最後、仏教者の吉水氏は東京・山谷でのホームレス、子どもたちの支援に取り組むなかで、仏教の目指すものは「支援」に止まるのではなく「支縁」にあることを学んだという。氏は「支援」とは本来何を意味するのかを考えるなかで、「支縁」即ち様々な出会い、「縁」を支援することにあると気付かれる。曰く、仏教が結びつけるものは「仏と人」だけではなく、「人と人」「宗教と宗教」「人と居場所」「活動したい心と活動したい心」、さらには「私とありのままの私の心」「過去の自分と現在の自分と未来の自分」「死者と生者」「現世と来世」まで拡がるというお話であった。一つひとつ、事例を挙げてのお話から私自身は大いに考えさせられた。冒頭の「おふでさき」の理解から、人は様々なものとの出会い、結びによって救けられると述べた。では私たちの信仰にあっては何を結ぼうとするのか、「しやハせをよきよふに」するのか、今一度思案をしてみたい。吉水氏の思いを聞き、私は大きな宿題をいただいた。

ところで今回、特に天理教麹町大教会長の久保一元氏が、「天理教の教会としてのあり方―あたたかい家族のようなコミュニティを目指して―」と題して報告を行ったので、とても嬉しく聞かせていただいた。また出席者の高い関心も窺われた。内容は子ども食堂の取り組みを通して、教会が地域の「ひとり親家庭」「高齢独居老人」「在日外国人」とのご縁、出会いが生まれ、そこから支援、おたすけへと結ばれているお話であった。久保氏が今回のシンポジウムで発題した意義は、「しやハせをよきよふに」のお歌の理解を考え合わせるとき、決して小さなものではないと思いながら会場を辞した。

「元初まりの話」に登場する動物たち（39　最終回）

「元初まりの話」と進化論

おやさと研究所教授
佐藤　孝則　*Takanori Sato*

本シリーズの初回冒頭で、以下のように述べた。

「元初まりの話」は、人間世界創造の話であるとともに、人間救済のために明らかにされた真実の話でもある。この話にはさまざまな水域棲の動物たちが比喩的に登場する。それらは現存する動物であったり、想像上の動物であったりするが、そのこと自体は特に問題ではない。

ただ、親神による十全の守護と「元初まりの話」に登場する個々の動物との間に、どのような関係があるのか、とくになぜ教祖は私たちに特定の動物たちを示されたのか、なぜこの動物なのかなど、これまで比喩的に示された動物たちの視点からの研究・論考は少ない。

ここで述べたように、本シリーズでは、親神による「十全の守護」と、比喩的に登場した動物たちとの関連性、蓋然性について、詳しく紹介してきた。とくに、それらの動物たちに対する認識と存在感が、「十全の守護」の理解に役立てられるものであることを示した。

そこで、特定動物の同定を、主に幕末から明治にかけて広く庶民に読まれていた当時の百科事典、『和漢三才図会』（東洋文庫版）に基づいて具体的に明らかにした。

この『図会』の「巻第五十二　蟲（虫）部」の説明の最初に、「蟲〔音は仲（チュウ）〕とは生物の微少なもので、その種類は大へん多い」と書かれている。これは、蟲は小型動物を指している、ということになる。

安政３年、飯室昌栩（いいむろまさのぶ）は、日本で最初に「蟲」類を体系的に分類した『蟲譜図説』を著した。彼は「蟲」を「卵生蟲類」「化生蟲類」「湿生蟲類」「鱗蟲類」の４つに分け、狭義の「蟲」を表す昆虫だけでなく、広義の「蟲」すなわち両生類、爬虫類など900種以上を『図説』の中に収録した。これは、幕末当時、両生類や爬虫類も「蟲」の範疇にあったことを示している。

このことは、本シリーズに登場する10種の水域性生物（前号の図を参照）のうち、「大蛇」「大龍」を除く８種は、すべて広義の「蟲」の範疇に入ることを示している。「しやち」（鯱）や、「しやち」の「骨つっぱりの道具」が仕込まれた「うを」（鯢）においても、「蟲」の範疇に入ることになる。これら８種の動物たちは、「人間」が創造され、「陽気ぐらし」世界へと歩み進んで行くために必要な「雛型」および「道具」であり、比喩的に選ばれたものたちである。

一方、親神は人間創造の守護を教えるため、「大龍」すなわち月様を「うを」の体内へ、「大蛇」すなわち日様を「み」の体内へ入り込ませた。このようにして、「蟲」より大きい「大龍」と「大蛇」の２種は、月日親神として私たち人間の体内へ入り込み、「十全の守護」の理を理解しやすいようにと、体内外でその機能を具体的に示してくださっている。私たちは、私自身も含めて、この「十全の守護」の理を忘れがちだが、常日頃から再考する機会を持ち続けたいものである。

ところで、『天理教教典』第三章に「人間は、虫、鳥、畜類などと、八千八度の生れ更りを経て、又もや皆出直し、最後に、めざるが一匹だけ残つた」とある。

ここでの「人間は、虫、鳥、畜類などと、八千八度の生れ更りを経て」は、人間は、虫（広義の「蟲」の意味）、鳥、そして畜類へと何度も世代交代を繰り返した、という意味である。

これは、およそ３億6000万年前に“陸上の住まい”を始めた両生類の段階の人間が、その後爬虫類、鳥類、哺乳類へと進化し、およそ700万年前にはチンパンジーから分化し、「めざる」として人間へと進化したことを意味している。この経緯は、私たちが学校で習ってきた脊椎動物の進化を的確に表している。

また、この「めざる」には、メスからメスへと祖先のルーツを伝える役目のミトコンドリアDNAと、人間としての姿形を次世代へ伝える役目の核DNAが、「皮つなぎの道具」として仕込まれているのではないかと考える。

いずれにおいても、このような脊椎動物の進化が「ダーウィンの進化論」として日本に紹介されたのは、東京大学に赴任したばかりのエドワード・モースによる、明治10年９月24日の講義が最初である。モースは、同年６月17日に訪日したが、同大学の動物学教授として招聘されて来たわけではない。シャミセンガイやホオズキガイなどの貝類が数多く生息する日本へ、３カ月間だけの調査・研究のために来日したのである。彼は貝類の専門家で、到着した２日後（19日）には、横浜から東京へ向かう車窓から、有名な「大森貝塚」を発見していた。

一方、同年４月に創立したばかりの東京大学は、動物学教授が決まっていなかったこともあって、東京に着いたばかりのモースに教授就任の申し出をおこなった。そして快諾を得て、７月12日にはモースと２年間の契約を交わした。最初の授業が、件の進化論の講義だったのである。

「人間もサルの仲間」という進化論の講義は、学生たちには刺激的で、翌明治11年６月30日には、学内だけでなく学外でも進化論講義が開催されるほど、一般社会からの期待も大きかった。「自然選択」「適者生存」「弱肉強食」といった考え方は斬新で新鮮であったことから、学生だけでなく一般社会にも受け入れられたのである。ただ、進化論を受け入れられないキリスト教の宣教師たちは眉をひそめ、反論することもあったようである（ジョン・セイヤー、守屋毅ほか『モースの贈り物　甦る100年前の日本』小学館、1997年）。

既述したように、日本で最初に進化論が講義されたのは、明治10年９月24日である。しかし、天理教の３原典の一つ、「おふでさき」の第６号に「元初まりの話」が登場したのは、明治７年12月以降のことである。

それまで聞いたこともなかった「進化論」の基本的な考えが、モースによって明かされる数年前、すでに「おふでさき」には、別の視点からであったとしても、進化の話が示されていた事実は、生物学徒の末席に座する者としても、目から鱗なのである。

一般的に考えても、「大和の片田舎に住む77歳の老女が、なぜ、脊椎動物の進化を知っていたのか？」、しかも「なぜ、モースよりも早くそのことを知り、文字として残していたのか？」という不可思議さは否めない。ただ、日本の「進化論史」研究からみても、その事実は驚愕に値することだけは確かである。

このことは、教祖・中山みきが人知を超えた存在者であることを裏付ける確かな証左だと、私は誇らしく思っている。（完）

太平洋戦争と北米伝道 ⑥ アメリカ本土での戦後復興

おやさと研究所研究員
尾上　貴行　*Takayuki Onoue*

教信者たちの西海岸地域への帰還

日米開戦と同時に、アメリカ本土では天理教の教会長や布教師らが逮捕・抑留されただけでなく、やがて家族たちも他の日系人と共に西海岸の居住地から強制的に立ち退かされ、抑留された。各抑留所や収容所では細々と月次祭や信仰活動が継続されていたものの、実質的な布教活動は中断を余儀なくされた。また終戦直後は帰る家もなく信者も四散していたため、天理教伝道再建のめどは容易にはたてられない状況であった。戦前に西海岸に設立されていた教会の復興は、教会長や家族の抑留や収容状況によって様々であったが、その一例としてロサンゼルスのアメリカ伝道庁をみていくことにする。

アメリカ伝道庁の建物は、戦時中黒人系キリスト教会に貸与されていた。戦後、教会長や信者たちがロサンゼルスに帰還すると、庁舎はそのまま黒人系キリスト教会が使用していたため、交渉の上返還してもらい、住宅難の教信者のホステルとして利用した。一時には、19 家族 81 名、独身者 9 名が同居していた（天理教アメリカ伝道庁編『天理教アメリカ伝道庁 50 年史』天理教アメリカ伝道庁、1984 年、30 頁）。こうした混乱の中で、アメリカでの生活をあきらめ、日本へ引き揚げた布教師や信者たちもいた。戦前から伝道庁の書記を務め、戦後に３代庁長となった吉田進は当時の様子を以下のように述懐している。

> 教会は太平洋沿岸総立退きで、あとかたも失くなり、信者は離散して、復光（ママ）の見込みもたたなかった。帰っても住む家もなく、生活の保障は何にもなかった。同じ苦しみをなめるようなら負けたとは分っていても日本へ帰った方がまだましだ、という考えをもつ者が教会長の中にも何人かあった。それも全く無理ない事だった。これらの人を説いて、今後のアメリカ布教のため足を留めてもらうのに、一苦労だった。私自身さえ、残ったとしてもこの先一体どうなるものか、見当もつかず、大きな不安に駆られていた。（『一れつ』No.238、1974 年 11 月号、６～７頁）

こうして吉田は、一人でも多くの教信者をアメリカに引き留める努力をし、徐々に体制を整え、教義講習会を開催するなどして、管内活動の立て直しに奔走した。1951 年には中山正善２代真柱が戦後初めて渡米し、管内の教信者を元気づけるとともに、新たな活動の一つとして日米関係友好化への貢献を掲げ、日本文化紹介のために教会本部から伝道庁に図書が定期的に送られるようになった。そして同庁内に「ひのもと文庫」が設けられ、所蔵書籍２万冊を一般に公開して日本文化の紹介につとめた。この文庫に関しては、南カリフォルニア州の歴史を綴った『南加州日本人史　後編』（越智道順編、南加日系人商業会議所、1957 年）で特筆すべきこととして記されている。

中西部・東部への展開

戦時の抑留と強制収容によって、アメリカ本土の西海岸に集住していた日系人たちの中には、アメリカ政府の政策もあって戦後に中西部や東部地域へ転住していったものもおり、その中には天理教の教信者も含まれていた。そしてこれが契機となり、布教活動が中西部や東部でも展開されるようになった。戦前、多くの日系人にとってアメリカ中西部・東部は無縁の地であったが、戦後は各地に日系人が定住するようになった。また飛行機などの交通手段が改善されて行く中で、人々の交流も頻繁となり、布教活動伸展の上にも大きく影響することになった。

サクラメントに戻っていたサクラメント教会２代会長の小島久満吉が、1947 年２月にニュージャージー州のシーブルックに収容されていた橋本庁長を訪問し、その後シカゴで布教活動に従事していた布教師や信者たちを訪れたことによって、布教拠点開設の動きは促進された。1950 年にはシカゴにおける最初の天理教教会としてウエストシカゴ教会が設立された。『シカゴ日系人史』（藤井寮一編、シカゴ日本人会、1968 年）には、戦後の仏教会、キリスト教会などの宗教界の動きが記されている。天理教に関しても、「天理教ウェスト教会（ウエストシカゴ教会を指す、筆者註）の鎮座奉告祭は 1950 年 11 月 28 日に南ソーヤー街 1953 で執行され、教会設置奉告祭と鈴木いまよの教会長就任奉告祭は、アメリカ伝道局長その他の出席を得て翌 19 日に営まれた」（同書、300 頁）と記されている。

こうして、戦後、日系人がアメリカ全土へ拡散していく中で、太平洋沿岸の日系移民社会に限定されていた天理教の伝道が伸展し、イリノイ州、ニュージャージー州、カナダのオンタリオ州トロントなどへ教会が移転したり、また新たに設立されたりした。1951 年にアメリカ各地を巡回した中山正善２代真柱は、西海岸へと帰還した日系人たちが再建に苦しみ疲弊している中で、「立派に教会として、むしろ心身共に疲れたと思われた西海岸の教会よりも、新設教会としての活気さえもって、シカゴには教会があったのであります」（『みちのとも』1951 年 12 月号、12 頁）と、シカゴの布教師たちが新たに活発な動きを見せている様子を述べている。

「アメリカ人」としての定住と世代交代

戦後、一世たちは「アメリカ人」として定住を決心するようになったとされる。吉田進３代庁長は、戦前と戦後で大きく変わったことの１つとして日系移民社会の一世たちの意識をあげ、「戦前の在留同胞は腰掛け的な気持であったが、今度は、自分はアメリカの土になる、又、子供はアメリカ人であり、アメリカにとどまるから親達もアメリカの土になるという気持ち」（『みちのとも』1949 年、6 頁）になったとし、言葉の問題、文化習慣の違いなどによりアメリカ社会にとけこめずにいた日系人たちが生き方や考え方を大きく変えたと述べている。

また戦後は成人した二世人口が増加し、日系移民社会の中心的存在が急速に二世へと移行していった。戦前、「1924 年移民法」の制定以降、日本人の移住を目的とした渡航が禁止されると、アメリカ人である二世を日本とアメリカの「架け橋」として育成しようとの動きがあったが、日米関係が悪化し最終的に開戦したために頓挫していた。このように一世たちの中には、アメリカ社会に適応していく上での二世への期待は戦前からあった。天理教においても、戦前から二世の育成は大きな課題であったが、戦後には非日系人への布教活動を考える上からも、一世による日本語での布教が、徐々に二世により英語で行われるという新たな展開がより期待されるようになったのである。

国内での日本語教育と海外での日本語教育 ④

天理教語学院
日本語教育センター主任
大内　泰夫　*Yasuo Ouchi*

文化活動としての日本語教育の展開

前号では、パリの日仏文化協会を例に文化活動としての日本語教育について述べたが、これは歴史的にも古く、教内ではこれらの活動が一つのモデルになっていると感じている。機会があって、シンガポール天理文化センター、香港天理日本語学校、ニューヨーク天理文化協会、ブラジル伝道庁日本語教室、天理から日本語教師を派遣しているパラグアイの日本人会日本語学校を視察したことがあるが、それぞれの拠点へ送り出す人材の育成の上でとても勉強になった。やはり国によって事情は違い、効果的に派遣前の研修を行うには、共通の部分やそれぞれに違う部分などを考慮に入れていかなければならないことも感じた。布教未公認、あるいは公認の国で布教の糸口を見つけるための活動、また布教活動をバックアップするための活動や日本語教育をはじめ文化活動を通して直接的に布教するのではなく、いわゆるイメージアップのための広告塔としての活動など、その役割は地域ごとに違うとも言える。2011 年 10 月には、日本語教育センターの業務として、海外拠点日本語教育施設長懇談会を天理教語学院で開き、現状報告や各拠点で行っている活動の情報を公開し、今後の活動に役立つように情報交換を行った。忌憚なく意見を出し合う場として、あえて会議とは銘打たず、懇談会という形式を取ったが、あらためて地域ごとの事情が違うことを感じた。意見交換をしても地域ごとの違いが浮き彫りになり、課題や問題点などを出してもらうだけで、その場の話し合いでは簡単に解決できないようなことが多かった。海外布教のための活動という点では皆、同じだとは言えるが、個々に対応していかなければならない課題も多いと感じた。

日本語学校がやはり一番

『海外布教伝道部報』第 146 号（1977 年）に、「海外布教と本教の日本語教育」というパリ日本語学校についてのレポートがある。鎌田親彦パリ出張所 3 代所長のものであるが、昭和 46 年 5 月に開校後 5 年半が経ち、登録者数も 700 を数えるくらいになった頃の話のようだ。

> 文化協会の諸活動の最初に日本語学校を選んだ理由は、例えば茶道や華道に比べて、日本語学校は少数の限られた階層のみでなく、最も真剣に日本との接触を希望している人々を、最も広範囲に吸収でき、且つこれらの人々との長期間に亘る人間的つながりが期待できると考えたからである。

このように、文化活動の中でも日本語教育を第一に進めた理由を述べている。また今後の問題点についても二つあげている。一つは教職員の問題で、開校当初からパリ大学で教鞭を取る日本語教育専門家を外部講師として現地採用していたが、教外者であり、将来的には教職員全員を布教意欲に燃えるようぼくで占めるようにしたいということである。もちろん教師としての素質と能力を備えた者で、信仰と日本語教師としての素養を兼備した者でなければならない。筆者が派遣された 1990 年には、教職員は現地採用のフランス人職員を除いてすでにすべて教内の者になっていたから、この問題は解決していると言える。もう一つの課題は、パリ天理日本語学校から日本へ留学希望するものを送り出せないことである。当時、天理大学選科日本語科があったが、直属教会長が保証し、卒業後修養科入学を誓約した者が、一れつ会（奨学金）の扶育を受けて入学を許可されていたからである。

鎌田氏の考えでは、広く教外者にも門戸を開く方が長い目で見て布教につながるという考えを持っていたと思える。この問題も現在では未信者であっても各拠点長が面談し、推薦する人を天理教語学院へ送り出していることを考えると、決して完全なものとは言えないが、時代はそれでもずいぶん変わって来ている。

天理独自の展開

宗教団体が行なっている海外での日本語教育の展開については、まだまだ研究が進んでいるとは言えないと思う。その中でも、創価大学の山岡正紀は 1996 年に天理を訪問し、「天理教における日本語教育の国際的展開について」（『創価大学比較文化研究 』15、1997 年）という論文をまとめている。その中で山岡氏は次のように述べている。

> 天理教は一種の社会貢献として、布教という最終目的とは直接無関係に日本語教育を行い、つまり大きな投網をかけ、その中から熱心に日本語を身につけた生徒を対象に布教を行うという手法を取っている。これは立場の違いにより、賛否両論があろう。布教という目的だけから考えれば非能率的である。一方で布教が達せられなくても純粋に言語教育の実績は残るし、文化活動を通じて社会貢献をしていくことで、現地社会の信頼を勝ち得て融和していくことが可能である。長期的な視点から見れば、そのこと自体も結果として布教につながるとも言え、興味深い。(113 ～ 114 頁)

山岡氏は天理教の日本語教育について関係者にインタビューを行い、全体的な天理教の日本語教育について客観的に調査していると感じる。確かに布教という目的だけから考えれば、非効率的であると筆者も感じる。山岡氏は結語で、「いかなる宗教においても、海外布教というものは、宗教的使命感に裏付けられた強靭な意志を原動力として、想像を絶する苦闘を繰り返しながら行われる、極めて人間的なものであろう。その意味で、日本語教育を布教戦略の一部として見ることはできたとしても、実際の海外布教に取り組んだ人々にとっては、それは枝葉の問題としか映らないことであろう。」と述べている。この論文が書かれた時から、もうすでに約 20 年の歳月が流れている。先人が過去に蒔いてきた種が少しずつでも実を結んできていると筆者は思う。客観的な数字だけを調べて、布教に繋がっているのかと言うのであれば、確かに教内でも賛否両論になるであろう。しかし、結論が出るのはまだ先であり、まだ前進している時期ではないのかとも感じる。

1990 年 11 月頃のエピソードだが、岩切耕一文化協会長（当時）から授業見学を頼まれたことがある。日本語教育振興協会の理事の人たちだったと思うが、フランスの日本語教育機関を視察に回っていて、最後に天理日仏文化協会を訪問するとのことだった。気軽に請け負ったのはよかったが、教室へ行くと後ろの方に座った数人に、やや緊張したが、いつも通り楽しく授業を行なった。その後、文化協会近くの日本料理店へ行き、会食となった。フランスのいろいろな日本語教育機関を回ってきたが、最後に日本語教育らしい授業を見せてもらったと授業見学の感想があった。後になって国際日本語普及協会（AJALT）の西尾珪子氏や九州大学の柴田俊造氏だと知ったのだが、筆者が帰国して 2 年後、天理教語学院開校前に日本語教育振興協会の視察があり、その時、視察に来られた西尾珪子氏と再会した。天理教語学院が認可をもらう上で、パリでのできごとが役に立ったのかどうかはわからないが、天理教が日本語教育をしっかりやっているという印象は持ってもらえたのではないだろうか。地道に国内、海外で日本語教育を展開していることが幅広く理解者を増やしているのではないかとも思える。

サイバー空間における「分身の術」と生身の人間

おやさと研究所教授
金子　昭　*Akira Kaneko*

疑惑の偽名著者

キルケゴールは、その短い著作活動の期間におびただしい著作を刊行した。それらの多くは偽名で著されたものである。著作中の登場人物、執筆者、著作者、編集者、刊行者を含めると、十指に余る偽名が二重三重に組み合わされ、手の込んだ構成になっている。例えば、『あれか、これか』（1843 年）では、ヴィクトル・エレミタなる人物が、古道具商で購入した机の未知の引き出しから偶然発見した手記を刊行した形になっている。ところがその 2 年後の『人生行路の諸段階』（1845 年）では、彼を含む他の偽名著者たちによる「饗宴」の様子が描かれていたり、かと思えば湖底から引き揚げられた秘密の日記が収録されていたりする。これら雑多な原稿類を、ヒラリウスという製本業者が合本にして出版したのがこの本なのである。

もちろん、キルケゴールが自分の名前で出した著作（いわゆる建徳的講話を含む宗教的著作など）もある。彼自身は、“実名”で刊行されたものこそ、自分の真の思いを著した著作だと述べている。しかし、読者はそれをあまり真に受けないほうがよい。なぜなら、彼が他ならぬ自分自身のために書き残した、これまたおびただしい『日誌』の中にも、後世の人々が読むだろうことを想定して巧妙な編集が施されており、何が彼の“本音”なのか、あるいは何が“事実”なのか判然とさせない仕掛けになっているからである。まして公刊された著作は、偽名・実名にかかわらず、そのそれぞれについて慎重な作品論的分析が必要になるのは当然なことだろう。

我々は、それらの作物（さくぶつ）を一切合財含めて、キルケゴールの作品と呼ぶ。そのとき「キルケゴール」とは、これらを著した著者たちの総称ともなる。しかし、キルケゴールと呼ぼうが、キェルケゴールと名指そうが、この“実名”が果たして Søren Kierkegaard (1813-1855) という歴史上の人物と重なるかというと、そうとも言えないのではないだろうか。デンマーク語の発音に近い形で記せば、「ソェーアン・キャケゴー」として生きたあの 19 世紀前半のデンマーク人が、我々読者の前に現れている「キルケゴール」とぴったり同一の人物なのかと言うと、どうしても疑問符が生じてしまう。「偽名著者には自分の言葉は一つもない」とキルケゴールは“実名”で述べている。しかし、生身の人間ソェーアン・キャケゴーは、実は思想家・著作家キルケゴールのさらに背後に立っているのである。

我々は、キルケゴールを知ることができるだろう。しかし、ソェーアン・キャケゴーは永遠に謎のままである。それは、ジョン・スミスや山田太郎と呼ばれる者の本当の姿、その人格の内奥は誰にも知られないのと同じ意味である。とすれば、キルケゴールという“実名”著者もまた、彼の数多くの偽名著者のメンバーの一員だと見做しても良いのではないだろうか。キルケゴールの「分身の術」は、もしかしたら自分自身の“実名”をも分身として巧みに立てていて、読者はまんまとその術策に掛かっているのかもしれない。

インターネット上の“水平化”現象

21 世紀の現代、インターネット上において、我々はブログや掲示板やツイッターなどに実名著者や偽名著者が氾濫しているのを見る。一人で何名ものハンドルネームを使い分ける者がいるかと思うと、男性が女性の名前を、女性が男性の名前を使っていたりする例もある。キルケゴールは『現代の批判』（1846 年）で後世の大衆社会を予見したが、彼の批判はヤスパースをしてあたかも昨日書かれたようだと言わしめた。その大衆社会の有りようは、20 世紀初頭のヨーロッパ社会の状況であった。しかし、その後さらに百年近く経った、21 世紀初頭のグローバル社会の状況はどうであろうか。

キルケゴールによれば、大衆社会（彼は公衆 Publikum という言葉を用いている）は新聞ジャーナリズムが助長するという。そこでは、あらゆるものを低次の水準に平等に置く“水平化 Nivellering”の現象が猛威を振るっている。しかし、水平化の主（あるじ）はどこまでも公衆である。彼らは無名で書くだけでなく、自署までして無名で書く。公衆は全国民、いや全人類を包括しているかのように見えるが、実のところ人間はだれ一人としてそこに関与していない。その意味で公衆とは一切にして無なのである。一方、今日のインターネット時代では、だれもが本名もしくは匿名で自由に意見を発信できるようになった。しかしながら、その精神構造はまったく同じ、いやむしろ水平化の勢威がますます浸透してきたとも言えるのである。

サイバー空間の向こう側にいるのは

公衆とは、巨大な蜃気楼のような存在である。今風の言葉でいえばバーチャルな存在だと言ってもよい。しかし、恐ろしいのは、そこに一頭の犬が飼われていることだ。傑出した人物が現れようものなら、公衆はよってたかってこの犬をけしかけ、噛みつかせ、自分たちと同じ水準に引きずりおろそうとする。これが水平化の勢威にほかならない。そして、噛みついたのは犬だと言って、公衆は責任を取らない。公衆は巨大な幻なのだから、責任など取れないのである。まるで、現代のインターネットにおける“炎上”騒動を予言しているかのようではないか。

だが、我々はサイバー空間の向こう側に、生身の体を持った人間がいることを忘れてはならない。それはいつの時代においてもそうである。そしてキルケゴール自身が、いや生身の人間であるソェーアン・キャケゴーが、同時代の公衆の犬に噛みつかれてしまったのである。これが有名な「コルサール事件」と呼ばれるものである。『コルサール』（海賊船）という週刊新聞上に、ある日突如として、彼の姿が奇怪なポンチ絵として描かれ、愚劣な記事によって立て続けに嘲弄された。この事件によって彼の平穏な日常生活は一変し、まるで殉教のようになってしまった。街を歩いても、人々が袖を引いてくすくす笑い、子供たちが「『あれか、これか』がやって来るよ」と囃（はや）し立てるので、彼は今までのように人々と親しい会話もできなくなってしまった。実はこの事件こそが、彼をして『現代の批判』を書かしめたとも言えるのである。

名前はいくらでも分身の術がきくが、生身の体はだれもが一つしか持たない。サイバー空間の中で実名偽名によるお喋りが延々と続き、人間の水平化現象が進行する昨今である。しかし、我々だれもが生身の体を持った一人ひとりの人間であるという現実は、断じてバーチャルなものではないのである。

ライシテと医療 ②

天理教リヨン布教所長
藤原　理人　*Masato Fujiwara*

前回、20 世紀までのライシテと医療の歴史について述べたが、今回は医療国際ジャーナル紙 (Journal International de Médecine) がネット上で公開した「病院の試練にさらされるライシテ (La laïcité à l'épreuve de l'hôpital)」というビデオを取り上げてみたい。わずか 11 分 30 秒のインタビュー形式のビデオで簡略すぎると言えるかもしれないが、医療現場におけるライシテを分かりやすく説明している。このビデオ内で話すニコラ・カデン氏は、ライシテ監視機構（Observatoire de la laïcité）の一員である。ライシテ監視機構は、「首相直属の機関で、ライシテに関する政府の政策を助けることを目的とし」（けいそうビブリオフィル〈勁草書房編集部ウェブサイト〉)、議員、官僚、研究者、ジャーナリストら多様な構成員が独立した調査を行っている。

病院に適用されるライシテの原則は、現代の日本人にとっても理解しやすいと言えるだろう。セム系一神教の独自性に対応した部分もあるが、その考え方の多くは今の日本の医療現場にあてはめても通用すると思われる。

以下、ビデオの内容の要約である。問いに対するカデン氏の回答部分のみがビデオで流されている。

まず医師や看護師の役割に触れている。もちろん中立かつ公正な立場で患者に接することは言うまでもないが、2010 年以降、治療や看護にあたる者は顔を覆い隠すものを身にまとうことは禁じられている。これについては、医療現場における安心を保証する意味合いもある。

患者は私的空間でもある病室内でお祈りをすることは認められるが、個室でない場合、当然他の患者に迷惑がかかってはいけない。早朝や深夜のお祈りで同室の患者が眠れないというようなことがあってはいけないし、またチラシを配るなどの布教活動や、複数で儀礼をおこなうことも許されない。一方で、施設内には信仰活動が実践できる部屋が用意されている。

しかしながら、こうしたルールがあっても、実際の現場でどのぐらいの数の違反があるのかは統計が取れていない。各病院がおかれる状況も異なり、それに伴って違反に対する判断基準も変わってくる。

一例として、あごひげがイスラム教の宗教的象徴だとして、ある医師が免職処分を受けた例がある。彼はコンセイユ・デタ（国務院）に上告しており、最終的な結果は分からないが、本人が宗教的意味合いをもってひげを生やしていると認めていたようで、そうなると病院の中立性に抵触する。本人がそう認めたのなら、勝訴することは難しいだろう。

これに関してビデオにはない内容を補足しておく。2017 年 12 月 30 日付の『ルモンド紙』によると、この医師はエジプト人で 2013 年 11 月からメヌフィア（Menoufia）大学とフランスの病院との協定の一環で派遣された。病院側は研修前から３度にわたりひげを剃るように要求したが、医師が聞き入れなかったため、2014 年２月に解雇にふみきった。裁判所は、ひげそのものが特定宗教への帰依を示すものとは言えないものの、個人的な意思の尊重を主張しながらも彼自身が宗教的理由でひげを生やしていたことを否定しなかったことをもって、公的施設における中立性に反するという司法判断を下し、病院の言い分を認めた（以上同紙）。この後にコンセイユ・デタに上告しているはずだが、その結果はまだ出ていないようである。

再びビデオに戻る。

患者の宗教的信念から医療行為を拒否する権利は存在するが、仮に命に関わるという理由で医師が患者に治療行為を強いたとしても罪には問われないという判決が出ている。もちろん、医師の方も患者の意志を尊重し医療行為を控えることもできるが、それが医療放棄とみなされることがあってはならない。

また病院における男性医師、女性医師の拒否や医師の選択については、病院の医療行為の妨げになるものであってはいけない。どうしても必要な場合は病院付きの司祭に仲立ちに入ってもらう、あるいは書面にて手続きを踏んで選択することも可能であるが、病院側は医師団の仕事を妨げることになる要望は受け付けられない。

医療行為に見せかけた宗教儀礼としての割礼もわずかながら存在するが、基本的に治療としての施術以外は認められていない。

また保護者は、自身の信仰上の理由をもって子供に対する医療行為を拒否することはできない。そのような場合、保護者が罪に問われることになる。

医療チームの中には、宗教的理由から断食を行うものもいるだろうが、病院側が職務を全うできないほど弱っている状態にあると判断した場合、食事をとるよう指導しなければならない。いずれにせよ、病院内では宗教的理由が第一の行動指針になってはいけない。

1905 年法によって、寄宿舎、軍隊、刑務所と同じように、病院にも宗教司祭を置くことが定められている。これは信教の自由を保障するうえで、こうした施設内においても信仰をサポートする必要があるからであるが、同時に患者と医療チームの相互理解を助ける意味合いもある。したがって、病院で宗教司祭の任にあたるものは、ライシテの事前研修を受け、公的機関におけるライシテの原則の適用方法について学ばなければならない。

以上がビデオの内容である。このビデオの内容を見ても分かるように、特に理解しにくい原則はない。そして信仰空間と医療現場の境目を見極める難しさは常に存在するとしても、ライシテによって命に関わる問題が頻発しているわけでもない。つまり、医療現場においては宗教は中立化され、患者の方も病院での治療に特定宗教の信仰的な力を求めなくなってきていると考えられる。患者の欲求が治癒であることは間違いないだろうが、現代においてその欲求は科学によって満たされるという意識が根付いてきているのではないだろうか。

[参考資料]
医療国際ジャーナル紙 https://www.jim.fr/medecin/videos/e-docs/la_laicite_a_lepreuve_de_lhopital_169634/document_jim_tube.phtml。
けいそうビブリオフィル https://keisobiblio.com/2016/11/28/jeanbauberot-conference01/4/。
フランス政府公式サイト https://www.gouvernement.fr/observatoire-de-la-laicite。

初期仏教に見る「ことば」の諸相 ⑤

天理教海外部翻訳課
天理大学非常勤講師
成田　道広　*Michihiro Narita*

論争の超越

パーリ語原始仏典に見る釈迦の「ことば」からは、無用な論争をあえて避けようとする釈迦の姿勢がうかがえる。特に前回で指摘した通り、バラモン教への直接的な非難や排斥はあまり見受けられない。

> 修行僧らよ、われは世間と争わず。されど世間がわれと争う。法を語る人は、世間の何人とも争わず。世間の諸の賢者が「無し」と承認したことを、われもまた「無し」と語る。世間の諸の賢者が「有り」と承認したことを、われもまた「有り」と語る。（中略）修行僧らよ、例えば青蓮華、または紅蓮、または白蓮が水のうちに生じ、水の中で成長し、水から上に現れて出て、しかも水に汚されていないように、修行僧らよ、実に如来は世間の中で成長し、世間にうちかっているが、しかも世間に汚されないのである。（中村、1960：34-36）

釈迦はこのように弟子たちに語り、バラモンやその他の思想家との不毛な論争を自らも避け、また弟子たちにもそのように教示していた。

また釈迦は、弟子たちの問いのなかでも形而上学的なものや無意義なものに関しては言及を避けたという。これを「アヴャークタ（無記）」という。釈迦の教えに関し、その要諦を説明解釈的に示したものが集められている「マッジマ・ニカーヤ（中部経典）」の第 63 経には、毒矢の喩を用いてこの「無記」に関する論及がみられる。弟子のマールンキャープッタが釈迦に次のような質問をした。1）世界は時間的に永遠か否か、2）世界は空間的に有限か無限か、3）生命と身体とは同一か否か、4）如来は死後存在するか否か。これらの命題に対して釈迦が回答しなければ自分は還俗すると言い出すと、釈迦はそれらには一切答えず、次の「毒矢の喩」をもって諭したという。

> マールンキャープッタよ、たとえばある人が毒を厚く塗った矢で射られたとしよう。彼の友人や同僚や親戚の者たちが内科医や外科医に手当てをさせようとしたとしよう。
>
> もし彼が、「わたしを射た者がクシャトリヤ階級の者か、バラモン階級の者か、ヴァイシャ階級の者か、シュードラ階級の者かが知られないうちは、私はこの矢を抜かない」といったら、またもし彼が、「わたしを射た者の名前はこれこれであり、姓はこれこれであると知られないうちは、私はこの矢を抜かない」といったら、またもし彼が、「わたしを射た者は背が高いか背が低いか中くらいか知られないうちは、わたしはこの矢を抜かない」といったら、またもし彼が、「わたしを射た者は黒いか褐色か金色の肌をしているかが知られないうちは、私はこの矢を抜かない」といったら、（中略）マールンキャープッタよ、その者はそれを知らないうちに死んでしまうであろう。
>
> マールンキャープッタよ、これとまったく同様に、「世界は永遠である」とか「世界は永遠でない」とか、「世界は有限である」とか「世界は無限である」とか、「生命と身体は同一である」とか「生命と身体は別異である」とか、（中略）世尊がわたしに説かないうちは、わたしは世尊のもとで清らかな行いを実践しないという人がおれば、マールンキャープッタよ、世尊によって説かれないままに、その人は死んでしまうであろう。（中略）マールンキャープッタよ、なにゆえに私はこのことを説かなかったのか。マールンキャープッタよ、なぜならこのことは目的にかなわず、清らかな行ないの基礎とならず、世俗的なものを厭離すること、情欲から離れること、煩悩を消滅すること、こころの平静、すぐれた智慧、正しいさとり、涅槃のために役に立たない。それゆえわたしはそれを説かなかったのである。（中村、2009：309）

このように釈迦はマールンキャープッタに諭した。世界が永遠であろうとなかろうと、それらがどうであろうと、現実に人々の人生において、生・老・死、悲しみ・嘆き・苦しみ・憂い・悩みが存在している。それらの根本的な解決のために現実的かつ実践的な教えを説くことの大切さを、上述の毒矢の喩によって釈迦は諭したという。彼は世の人々の苦しみを解決するうえで無用ともいえる論争を避けつつ、苦悩の根本的な解決に役立つことのみを説き、それに有用ではないと思われる事象に関しては一貫して沈黙を守った。

このような釈迦の教えからは、二律背反や二項対立といった構図を超えて、物事の本質を省察し、あるがままの道理を悟ることに神経を研ぎ澄ます彼の姿勢がうかがえる。

> ここ（わが説）にのみ清浄があると説き、他の諸々の教えには清浄がないと言う。このように一般の諸々の異説の徒はさまざまに執着し、かの自分の道を堅くたもって論ずる。
>
> 自分の道を堅くたもって論じているが、ここに他の何ぴとを愚者であると見ることができようぞ。他（の説）を、「愚かである」、「不浄の教えである」、と説くならば、彼はみずから確執をもたらすであろう。
>
> 一方的に決定した立場に立ってみずから考え量りつつ、さらに彼は世の中で論争をなすに至る。一切の（哲学的）断定を捨てたならば、人は世の中で確執を起こすことがない。（中村、1986：195）

様々な論争や思想的軋轢の超越とその桎梏からの解放を、聖なる沈黙によって希求した釈迦の態度は、当時のインド社会において精彩を放った。

釈迦は、様々な哲学や思想に対抗するような新たな観念的地平を開拓したわけでもなく、それまでの伝統を覆すような思想的転換を模索するために新たな宗教をひらいたわけでもなかった。また教団の長として権威主義的な組織を構築したわけでもなかった。むしろ、インド諸哲学派が論争に明け暮れ、形而上学的な命題の追求に没頭し、最終的には二律背反に陥ってしまっていた状況の中で、ひたすら精神的安寧と現実的苦悩の克服、そしてその実践を、一人の出家者として 45 年間にわたり身をもって世の人々に示した。

他の宗教や伝統、思想に対する寛容な釈迦の姿勢は、そのまま仏教における宥和的な特徴へと発展し受け継がれていったように見受けられる。そしてそれが他の地域や文化圏において柔軟に変容しつつ、仏教として広く受容される要因ともなった。しかし、逆にインドにおいては、そのような特徴によって仏教そのものの輪郭が不明瞭となり、それがバラモン教に基づくヒンドゥー的宗教伝統に自らをも埋没させる要因ともなった。そしてインドにおいて仏教は、次第にヒンドゥー教に吸収され、最終的には消滅するに至る。

[引用文献]
中村元監修『原始仏典第五巻中部経典Ⅱ』春秋社、2009 年第 2 刷。
中村元『釈尊のことば』春秋社、1960 年第 2 刷。
中村元訳『ブッダのことば スッタニパータ』岩波書店、1986 年第 5 刷。

1. ラテンアメリカ基礎知識の話

天理教コロンビア出張所長
清水　直太郎　*Naotaro Shimizu*

1・3人種構成について

あるコロンビア家族がいる。父親はスペイン系の白人、母親は黒人系。おそらく先住民か白人かと黒人系の「メスティソ（混血）」と思われる。彼らには二人の子供がおり、息子はどこから見ても黒人系、娘は白人であり、彼らが兄弟であると紹介されたとき、知識を持ち合わせてなかった私は「えっ？」とたじろいだ記憶があった。

混血とその進化

まず、ラテンアメリカ人というのは存在しない。ラテンアメリカ研究家の中川文雄氏は、次のように説明する。

> ペルーなどの中央アンデス諸国、グアテマラ、メキシコでは混血を含めて先住民の血統をひくものが最も多く、ブラジル南部、アルゼンチン、ウルグアイ、コスタリカでは白人が大多数を占め、またチリとキューバは白人人口が有色人口をやや上回っており、カリブ地域の大部分、ブラジル北歩粒の沿岸地帯では黒人とその混血の占める比率が高く、その他のところはメスティソと白人のさまざまな混血が、いずれも過半を占めることなく混在している。[(1)]

人種の構成は白人、黒人、先住民の他、メスティソ（白人＆先住民）、ムラート（白人＆黒人）、サンボ（黒人＆先住民）という呼ばれ方は一応存在する。ただ、現状はもっと複雑で多様化している。参考までに2007年にある研究所が行ったラテンアメリカ諸国の人口における人種構成を紹介する。[(2)]

種・国 (%)	アルゼンチン	ブラジル	チリ	グアテマラ	メキシコ	ペルー
白人	63	43	43	29	13	8
黒人	1	17	1	1	1	1
先住民	1	2	2	23	7	6
白人X黒人	8	17	6	8	7	10
白人X先住民	9	4	23	16	40	28
黒人X先住民	0	2	1	1	2	2
全ての混血	16	16	24	21	21	41
回答無し	3	0	1		1	4

人口構成の途上

ヨーロッパ人が現在のラテンアメリカに到着する以前に先住民が暮らしていたのにもかかわらず、ヨーロッパと異なりラテンアメリカ社会は相対的に新しく、未だ発展の途上段階であり、これからも変化を続けていくだろうと考えられる。当然、先進国と呼ばれる国々も人種構成の発展は続けているのであろうが、ラテンアメリカ諸国は自国の独自の文化の原型が確立しているかどうか。例えばフランス人やイタリア人は、言語、食文化など見ても、ルーツや伝統文化が明らかであろう。ラテンアメリカが新大陸、欧州が旧大陸と言われる所以かもしれない。また日本人の場合、日本の伝統文化も確立されていると思う。

スペインやポルトガルがいわゆる中南米に到着して以来16世紀から20世紀まで、大雑把に言及すると、人種の割合は変化し続けている。それは18世紀からのアフリカ、ドイツ、イタリア、アジア・オリエンタル系の移民も人種関係で大きな作用を及ぼしている。従来の白人＋先住民という構図に黒人、アジア人が追加されてきて、ますます複雑化してきているのが現状である。民族と人種の区別や定義をする研究もあるが、それについては割愛する。

コロンビアの人種構成

コロンビアの人口について、1772年、1852年、1965年、2007年のコロンビアの人種構成[(3)]を比較してみよう。

種類・年号	1772	1852	1965	2007
メスティソ	52.1%	42.3%	58.0%	39.0%
白人	19.0%	19.0%	20.0%	37.0%
先住民	21.2%	17.8%	1.0%	2.0%
ムラート		11.8%	14.0%	17.0%
黒人	7.7%	3.4%	4.0%	4.0%
クォーター		1.5%	3.0%（サンボ）	1.0%（サンボ）

ご覧のように、少しずつ各人種間で混血が進んでいる。2007年のメスティソの割合が減ったということは、推測ではあるが、自己申告の時点で先住民の血が何世代か以前に入っていても、「白人」と回答した人が多かったのではないかと考える。

移民と他の民族グループ

18、19世紀のアフリカからの流入。これはカリブ諸国を通してコロンビアにも大きな影響を与えている。19、20世紀にはドイツ人やイタリア人の移民がアルゼンチンやチリに渡り、同時期において、アジアからも中南米への移民が行われた。コロンビアでは今年日本人移民90周年である。ただ、コロンビアの場合は、ブラジルやアルゼンチンなどと比べて移民の数はそう多くない。

特筆するのは、アラブ人（シリア、レバノン）が19世紀末頃、またユダヤ人が17世紀頃から移民していることである。ラテンアメリカに一攫千金を狙う独身者が多かったという。現在約250万のアラブ系の人がコロンビアに在住している。[(4)]

微妙な差別

コロンビア第3の都市カリでは、学校（幼稚園～高校）で学費が1位、2位を争うボリバル学園とブリティッシュ学園にはほとんど有色人種（黒人系）の生徒はいない。近年はそうでもないが空港では白人が多く、バスターミナルはやはり黒人系が多い。つまり上層階級は白人が多く、中流、下層に行くに従って有色人、黒人が占める割合が多くなっているのが現状である。もちろん法律は平等を謳っている。人々も見かけ上は「肌の色での差別は存在しない」と装っている。が、昇進、給与、進学率ではあきからに白い方が有色人種より優位な社会がコロンビアの現実である。その一例を挙げると、肌の色の違いによる子供の教育年数である。コロンビアにおいて、黒人系は6.76年、ムラートは7.52年、メスティソは8.72年、白人は9.28年である。[(5)] これは未成年者（18歳）の教育年数だが、ちなみに日本は憲法第26条第2項の規定を受け、義務教育の年限を9年と定めている。が、最近では未成年の定義も変更の過渡期にあるので、二つのケースの比較は難しいと思う。

［註］

（1）国本伊代・中川文雄編著『ラテンアメリカ研究への招待』新評論、2005年、40頁。
（2）Simon Schwartzman, 'Étnia, condiciones de vida y discriminación,' *Capítulo II* Vol.I, 2008: p.2.
（3）https://es.wikipedia.org/wiki/Etnograf%C3%ADa_de_Colombia.
（4）https://www.portafolio.co/tendencias/bienvenidas-diferencias-celebrar-multiculturalidad-75074 (Portafolio, Unicef).
（5）https://www.researchgate.net/publication/320461630_Diferenciales_de_ingreso_por_el_color_de_la_piel_y_desigualdad_de_oportunidades_en_Colombia “Diferenciales de ingreso por el color de la piel y desigualdad de oportunidades en Colombia”.

ベルギー領コンゴの独立 ②

おやさと研究所教授
森　洋明　*Yomei Mori*

二つのコンゴの首都、ブラザヴィルとキンシャサは川を挟んで隣接しているので、テレビやラジオ放送を双方で受信することができる。現在、国内に２つのテレビ局しかないコンゴ（ブラザヴィル）と比較すると、人口が６千万人を超えるコンゴ民主共和国（キンシャサ）では多くのテレビ放送局がある。ラジオから聞こえるリンガラミュージックの多くはキンシャサの放送局からである。ただ、私が在住していた 80 年代は、モブツ大統領の独裁政権が全盛時代であり、放送も規制されていた。そのなかで、大統領を讃える映像は頻繁に放映されていた。

このモブツ大統領は、ベルギー人をはじめ多くの白人や黒人が犠牲となったいわゆる「コンゴ動乱」に終止符を打った「英雄」であり、また東西冷戦の状況下でアフリカにおける西側諸国の「砦」という役割が期待されていた人物だった。このコンゴ動乱を詳細に語るには紙面が足りないので、ここではその大まかな出来事について追っていきたい。

コンゴ民主共和国は、1960 年６月 30 日にベルギーから独立を果たしたものの、期待とは裏腹に黒人の生活は独立前と大きな変化はなかった。例えば、行政面ではベルギー人（白人）がそのままの立場で、コンゴ人（黒人）の「上位」に立っていた。その背景には、高等教育には力を注がれていなかったこともあり、コンゴ人で管理職を担えるようなエリートが少なかったことが影響していると思われる。また、レオポルド二世の圧政にコンゴ政府が関与しなかったことの反省から、ベルギーが植民地行政に直接的に関わってきたことも無関係ではないだろう。それは軍隊でも同じで、独立後も白人将校が黒人兵士を指導監督する構図は変わらず、黒人兵たちは不満を募らせていた。とくに、こうした社会の大きな変化のなかでは、さまざまな憶測や根も葉もない噂が飛び交い、そのなかには独立すれば「給料が倍になる」などといったものもあったようだ。

期待が大きいだけに、失望も大きくなったのだろう。武装手段を持つ一部の兵士たちが、白人に対して攻撃的となり、ベルギー人が避難する状況となっていくのだった。コンゴ独立の立役者であり、独立後は首相として新政府の責任を担っていたパトリス・ルムンバは、こうした黒人兵士の要望に応えるべく、ベルギー人司令官の解任を決めるなどして、白人指導であった軍隊の黒人化を強行していく。このときに参謀総長に任命されたのが、後に独裁者となるジョセフ・モブツだった。

ルムンバのこうした急進的な姿勢にベルギー政府は猛反発する。自国民の安全確保を理由として、ベルギー軍を現地に派遣する事態となる。実際、ベルギー人に対する略奪や暴行事件は頻繁に起こっていた（この時の様子は、『コンゴ』〈石坂欣二著、二見書房、1961 年〉に詳述されている）。植民地宗主国に対してもともと批判的であったルムンバは、ベルギーとの国交の断絶を宣言し、事態の解決を国連に委ねるのだった。こうした動きの一方で、ベルギーとは良好の仲であったカタンガ州のモイーズ・チョンベが、鉱山資源の豊富な南東部に位置するこの州の独立を宣言し、その臨時の大統領として自らが就任することになる。ベルギー政府もそれを水面下で支援していたようだ。ベルギー人の保護を理由として、軍隊をカタンガ州の首都エリザベートヴィル（現在のルムンバシ）に出動させた。とくに欧米資本で鉱山開発している「ユニオン・ミニエール社」といった会社もあり、ベルギー政府もその大株主であった。いずれにせよ、国の半分近い富を生み出すこの州の独立は、コンゴにとって大きな問題でもあり、そこに投資している国々にとっても決して放っておけない問題でもあった。

ルムンバから要請を受けた国連は、コンゴは「独立した一国家」であるとの上からベルギーの介入を非難した一方で、カタンガ州の問題は「内政問題」だと判断され、不介入となった。周辺国から集められた国連軍が治安回復のためにコンゴ国内に展開するとともにベルギー軍は撤退していくのだが、カタンガ州の状況は変わることはなかった。

カタンガ州を取り戻そうとするルムンバは、こうした状況を前にソ連からの援助を模索するようになるのだが、東西冷戦の最中のことでもあり、アメリカをはじめとする西側諸国から、彼は要注意人物として見なされていくことになる。さらに彼は、もともとさまざまな面で不一致だったものの、独立するということだけで手を組んでいたカサブブ大統領とも衝突することになる。その結果、大統領と首相が双方にお互いを更迭し、国全体がさらなる混乱に陥っていくのだった。

このような混乱のなか、ルムンバはチョンベ大統領の命令によって逮捕され、秘かに処刑されてしまう。そこにはルムンバによって参謀総長に任命されたモブツが、チョンベ側についたことも大きく影響しているようだ。またベルギー政府もこの暗殺計画に関与していたとも言われている。こうして、独立前には国民的英雄であったルムンバは、独立後のこの混乱のなかで、30 年という短くも激動の生涯を終えるのだった。それはまた、コンゴが独立して１年すら経たない 1961 年１月のことだった。独立前後の彼の活動の様子は『ルムンバの叫び』（2000 年）というタイトルで映画化されている。

ルムンバが亡くなったからといって混乱が収束したわけではない。カタンガ州の一方的な独立は、新生コンゴにとっては重大な問題であり、コンゴ大統領カサブブとカタンガ州の暫定的大統領チョンベは対立していくのは必然的であった。それに加え、ルムンバ派の残党勢力は、共産圏の拡大を図るソ連の支援を受けてゲリラ活動を展開し、「コンゴの再独立」をスローガンに北東部の主要な都市を「解放」していくのだった。彼らは「ルムンバの水」と呼ばれる「魔法の水」を身体に振りかけることで銃弾が跳ね返るとされ、果敢に戦いに挑んでいった。英雄はしばしば神聖化されるのである。

フランスから独立したコンゴ共和国とベルギーから独立したコンゴ共和国（現在名はコンゴ民主共和国）。1960 年には同名の国家が誕生したわけだが、かつてはどちらもコンゴ王国の領土であり、両国間には今のような国境があったわけではない。現在でも話されている言語は共通で、隣国のラジオ局から流れていくるリンガラミュージックは、コンゴ・ブラザヴィルでも人気があり、そうした文化面では国境を感じさせない。しかし、この２国が辿ってきた歴史は大きく異なる。そこには、植民地化による分割や東西冷戦という世界的な動きが常に関与してきたのである。

遺跡からのメッセージ（44）

文化遺産を今に活かす⑪ 壮大な横穴式石室をもつ塚穴山古墳

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao Kuwabara*

明日香村の特別史跡・石舞台古墳

昨年の晩秋、学生たちと歩いた明日香村には、飛鳥時代、つまり７世紀に入ってから築かれた「終末期古墳」が数多く残されている。高松塚古墳とキトラ古墳は７世紀末から８世紀初頭に築造された小さな古墳だが、極彩色の壁画をもつことで全国的に有名だ。一方、石舞台古墳は、墳丘の盛り土が失われて天井石が露出した横穴式石室の壮大さで知られている。石舞台古墳は、古く 1933 年に末永雅雄氏が行った発掘調査によって、一辺 55 mの方墳または上円下方墳で、周囲に周濠と外堤が巡らされていること、墳丘と外堤の斜面に貼石が施されていること、横穴式石室には排水溝が設けられていることが明らかになった。石室内からは家形石棺の破片も出土した。玄室（石室が納められた部屋）の長さは約 7.8 m、通路となる羨道の長さは約 11.5 mで、両者を合わせた石室全体の長さは 19.3 mとなる。古墳の築造時期は７世紀の初頭から前半にかけてと見られ、被葬者は 626 年に没した蘇我馬子とみる説のほか、蘇我稲目説がある。高松塚古墳、キトラ古墳とともに、国の特別史跡として手厚く保護され、世界遺産暫定リストに記載された「飛鳥・藤原－古代日本の宮都と遺跡群」の構成資産にもなっている。また、３古墳ともに国営公園として整備が進められ、飛鳥観光の主要な見所となっている。

塚穴山古墳と史跡・杣之内古墳群

石舞台古墳を典型例とする「石舞台式」の石室として、古墳時代研究者として知られる白石太一郎氏が示すのが、天理市杣之内町に所在する塚穴山古墳だ。この古墳は、天理高校の敷地奥にあり、一般にはあまり知られていないかもしれないが、学術的・文化的価値が非常に高い極めて重要な古墳と言ってよい。明治年間には古墳の存在が知られていたものの、その後、いつの間にか忘れられていたのが、1964 年、土取り工事で古墳が再発見され、天理参考館が発掘調査を行った。その調査で、古墳は直径 65 mの円墳で、幅 13m の周濠がめぐること、埋葬施設は南南西に開口した横穴式石室であること、羨道に暗渠の排水溝が設けられていることが確認された。石室内からは、内面に赤彩を施した凝灰岩製の石棺破片、土器類などのほか、五輪塔・石仏などが出土し、中世に墓地として利用されていたことが明らかになった。

調査後は、古墳は破壊されることなく、天理高校の敷地内に保存され、1988 年、隣接地の建物建て替え工事に伴って、埋蔵文化財天理教調査団が第二次発掘調査を行い、墳丘東側の周濠の状況が明らかになった。周濠から出土した土器によって古墳の築造時期が７世紀初頭であることが確認されたほか、墳丘の規模が 63.4 mと修正され、横穴式石室の全長が 17.12 m（玄室 7.04m、羨道 10.08m）と、石舞台古墳に匹敵する規模であることが正確な実測図を添えて報告された。2014 年３月には、有志による杣之内古墳群研究会の活動として、天理大学と国際日本文化研究センターの合同チームが最新の機器を用いたレーザー測量調査を行い、石室と墳丘の３次元データを取得した。

2018 年度、考古学・民俗学専攻を中心とした共同研究「天理市杣之内地区における文化遺産の保存・活用を通じた学習と交流の空間デザインのための基礎的研究」（代表：丸山泰明）では、メンバーが成果を報告したり、現地研修を行ったりする研究会「大学キャンパスと文化遺産」を定例で開催し、研究を進めてきた。第２回の研究会（2018 年６月 25 日）では、旧外国語学校本館、創設者記念館、天理高校本校舎を見学したあと、高校敷地内を抜けて、塚穴山古墳を訪れた。その際、注目すべきことは、柔道場裏から塚穴山古墳に向かう通路の脇に、古墳の方向を矢印で示した道標が新しく設置されていたことだった。貴重な文化財の公開に向けた前進と評価できるが、さらに一歩進めて、古墳の歴史的意義を解説する説明板を設置するべきだろう。

塚穴山古墳の横穴式石室

第４回の研究会（同年９月 19 日）では、天理市文化財課の石田大輔氏が「杣之内古墳群をめぐる近年の状況について」と題した報告を行い、2017 年 11 月、国の文化審議会が西乗鞍古墳を史跡に指定し、史跡・西山古墳と合わせ、名称を杣之内古墳群とするとの答申をおこなったこと、翌 2018 年２月に官報に告示されて史跡指定が正式に完了したことなどを説明した。一方、天理大学と天理市の共同調査が始まった東乗鞍古墳をはじめ、杣之内古墳群には史跡に指定されていない重要古墳がいくつか存在することにも触れられた。とくに塚穴山古墳の場合は全国的に特異な事例で、読売新聞が記事（2011 年５月 24 日）で取り上げたように、国の文化審議会が国の史跡に指定すべきと答申を行ったにもかかわらず、地権者の同意が得られないため、官報での公示がなされないまま、史跡指定が未完了の状態が続いているのだ。このように棚上げ状態になっている遺跡は全国に 52 件あり、特別史跡 62 件を含めた史跡の総数 1,795 件（2018 年 11 月現在）を鑑みると、特殊な状態ということが理解される。一般に、遺跡を含む文化財の保存と活用に関しては、さまざまな利害関係を調整し、マネージメントを行うことが求められ、杣之内古墳群の西乗鞍古墳の場合も、民間業者との折衝が難航したのだが、利害の衝突を乗り越えて、文化的な価値が認められ、最終的に史跡指定に至った経緯がある。塚穴山古墳の場合は、文教地区の只中に所在するという、むしろ好条件を備えているはずなので、知恵を出して史跡指定を実現し、大計を立てて、すぐ隣に所在する西山古墳と一体的な保存・活用を図っていくべきだろう。

研究会で報告する石田氏

ヴァチカン便り（37）

法王はアラビアへ

大ローマ布教所長
山口　英雄　*Hideo Yamaguchi*

法王はアラビアへ

法王フランチェスコは、２月４日から始まった世界宗教のリーダーたち700人が集まった「人間はきょうだい」と銘打った国際会議に出席した。開催地はアラビア半島のアラブ首長国連邦のアブダビ。法王がアラビア半島に行くのはカソリックの歴史上で初めてのことだ。

法王は、イスラム・スンニー派の指導者であり、対話を重んじる人であるアフマド・アル・タイーブ師に迎えられた。彼は現状のままでは、世界は第３次世界大戦に向かってしまうのではないかと懸念を表明した。それに対して法王は「我々には２つのうち１つを選択するという余地はない。来るべき未来を共同して作り出すか、さもなければ未来はないと思う」と述べた。

アブダビの創立者記念会館で、世界の司教、イマム、ラビ、その他の宗教の代表者700人が集まっている前で、法王とアル・タイーブ師は、「世界平和のための人間きょうだいとその共存」「テロリズムを排除」「信仰の自由、個々の信条は別であっても自由の保障」そして「憲法において女性の権利を肯定」するというドキュメントに署名した。フランチェスコはイスラムとの関係を最重要視しており、個々人には平和のための道具になれと訴えている。

法王はさらに「いかなる暴力も許されない。例外なく罰せらなくてはならない。」「人間家族にとって自由のないということは奴隷のようなものだ。」「特に男女間の同等の尊厳と宗教の自由は信仰の自由を制限するものではない。」「宗教は暴力を容認し、テロを擁護する道具ではない。」「文化というものは憎しみを減らし、文明の成長を促進する。私は特に、現在のところ、イエメン、シリア、イラク、リビアの現状を考えねばならない。我々はそこから目をそらしてはならない。」と訴えた。

アラビア訪問地として、なぜ法王はアラブ首長国連邦を選んだのだろうか。ヴァチカンの中では、法王はなぜアブダビ選んだのかという疑問を持っている人がいる。中には、なぜカタールを選ばなかったのかという意見も聞かれる。

法王のアブダビ選択の動機は３つ考えられる。

① イスラム教代表者との話し合い。
② 特にアズハールの偉大なイマムでエジプト人のアル・タイーブ師に会えること、今回のアブダビの国際宗教会議の主催者との交友関係を深めること。
③ アラブ首長国連邦の90万人の信者（全員移民だが）に対し、信仰面において、大きな視野を与え、勇気付けること。

ヴァチカンは、第二ヴァチカン公会議以降、世界の各宗教と対話を深め、特にイスラムとの対話を重要視している。アル・タイーブ師は対話の相手として最適の人物と見ており、対話促進を決定づけている。アル・タイーブ師はパリに行った時に、イスラム過激派テロによるバタクラン劇場の襲撃事件の犠牲者の前に跪き祈りを捧げているのだ。

今回の法王のアブダビ訪問は、カソリックのなかでも、特にイスラエルのイエルサレムで2016年から活動し、信仰を指導する大司教ピエール・バッティスタ・ピッツァバッラは大歓迎の言葉を残している。「各宗派の宗教家や信仰者がお互いに何も話さなくて、さらには対話について一語も発しないのは、この世の終わりを告げていることになる。それではダメなのだ。」

大山鳴動、ネズミ一匹も出ず

カソリック世界における枢機卿、司教による小児愛症事件、性的虐待事件の多くは、今まで蚊帳の中に隠されていたが、前法王ベネディクト16世と現法王フランチェスコによって次々とそのベールが剥がされ、次第に世の中に知られるようになってきた。特に現法王の時代になって、次から次へと事件が明らかにされてきた。このような出来事は教会から一掃しようということから、法王の呼びかけで、世界の190カ国から枢機卿や司教がヴァチカンのシノドホールに集まり、この２月24日から３日間会議が行われた。そういう事件を起こさないようにという警告と勧告に終始したようで、具体的な解決策は出てこなかった。多くの人は非常に期待していたが、大山鳴動してネズミ一匹出てこなかった。ヴァチカンの外部のローマの街には、これらの事件の被害者がたくさん集まって街を練り歩いていた。テレビ局、新聞社の記者たちの質問に涙を流して事件を話していた人もいる。特にこの種の事件はアメリカでよく起きている。その数は大変な数になり、特にボストンはひどかったようだ。

アメリカ・ワシントンのテオドアー・マッカリック大司教は、枢機卿でありながら、未成年や成年を次から次へと愛してしまったのだ。現在88歳であるマッカリックは、法王から枢機卿の立場を剥奪され、現在は聖職者の資格でもなくなっている。また、1995年にはウィーンの大司教ヘルマン・グローエルが性的虐待事件に関係したことで更迭され、その後エディンブルゴのケイス・オーブリエンも事件を起こし更迭されている。さらにオーストラリア人の枢機卿ジョージ・ペルは、ヴァチカンで経済相をも務めた人だが、昔の性的虐待事件でシドニーの裁判所でその犯人と断定され、本年２月末のオーストラリアの法廷で有罪となり、懲役50年の刑に処された。

性は神からの贈り物

法王は本年１月末、世界若者集会が開かれたパナマからの帰国の便で、恒例の記者団の質問に答えた。特に性に関わる問題が出たのでそれを記そう。

質問：中南米では妊娠した若い女の子がたくさんいる背景に、教会が性教育を禁止しているからだというが、それは本当か。

答え：教会は何も性教育を禁止してはいない。学校でしっかり性教育をするべきだ。性は怪物ではない。愛するための神の贈り物である。性教育は理想的には家庭から始まり、特に両親との対話から始まるが、次第に親では難しくなるので、学校で教えるのが理想的だ。性を仲介とした商売をすべきではない。性によって人間失格ということを避けねばならない。

質問：中絶した女性にはどう話したらいいのか。

答え：中絶して泣いている人がいたら、こう話してほしい。「あなたの子は天国にいるよ。その子に子守唄を歌ってあげなさいよ。」と。

児童虐待：映された親と子、そして夫婦

おやさと研究所教授
堀内　みどり　*Midori Horiuchi*

「先生、どうにかできませんか。」

2019年1月24日、千葉県野田市の小学4年生だった栗原心愛（みあ）さん(10歳)が自宅の浴室で死亡し、父親が逮捕されました。少女は浴室で冷水シャワーをかけられ、両手で首付近を鷲づかみにされたとも報じられ、多くの人が心を痛めました。彼女は2017年11月に学校で行われた「いじめにかんするアンケート」に次のように書いていました。

> お父さんにぼう力を受けています。　夜中に起こされたり、 起きているときに蹴られたり　叩かれたりされています。　先生、どうにかできませんか。

翌日、担任が聞き取りをし、公開された心愛さんのアンケートの用紙には「きのうのたたかれた　あたま、せなか、首をけられて　今もいたい」「口をふさいで　ゆかにおしつける→自分の体だいじょうぶかな？」など、聞き取りの内容が加えられていました。

「もうおねがい　ゆるして　ゆるしてください」

2018年3月2日、東京都目黒区の船戸結愛（ゆあ）さん（5歳）は、継父の暴力が元で死亡しました。報道によると、両親は1月下旬頃から結愛さんに十分な食事を与えず、栄養失調状態に陥らせ、2月下旬頃には結愛さんが衰弱。嘔吐するなどしましたが、病院を受診させずに放置。低栄養状態などで起きた肺炎による敗血症で死亡させた疑いがあるということです（『朝日新聞デジタル』2018年6月6日）。6月には、死亡時の体重は平均（20kg）を下回る12.2kgだったこと、部屋には毎朝平仮名の書き取り練習をしていたノートが見つかったことも報じられました。父親から命じられていたということです。

> もうパパとママにいわれなくてもしっかりとじぶんからきょうよりもっともっとあしたはできるようにするからもうおねがい　ゆるして　ゆるしてください　おねがいします

逮捕・起訴された継父は、「言うことを聞かないので数日前に拳で殴った」と容疑を認めています（同、2018年3月3日）。

増える児童虐待

結愛さんの事件は多くのマスコミが取り上げ、児童虐待についての特集もありました。「FNNプライムイブニング」ニュースもその一つで、「1日1食　真冬のベランダに放置　5歳女児虐待死“最後の1ヶ月”」というタイトルで6月7日に放映されました。東京の自宅に“軟禁状態”だったこと、水をかけられたり真冬のベランダに放置されたこと、食事は味噌汁をかけただけ、外食時は一人だけ置き去りだったことを伝えました。さらに虐待死の背景を家族や行政などの対応に求め、2016年春に実母が結婚しその年に長男が生まれたこと、連れ子である結愛さんとともに、2018年1月まで香川県で暮らしていたと報じました。その間、2016年12月には、結愛さんが唇から血を流した状態で自宅前に放置されているところを発見され、香川の児童相談所が一時保護。2017年3月にも再び外に放置され、2度目の一時保護となっていました。この間、継父は傷害容疑で2回書類送検、いずれも不起訴処分となっていたことを踏まえ、虐待の連鎖がなぜ起きるのかや行政の対応の慎重さについて、専門家を交えた話を伝えていました。

心愛さんの事件は、結愛さんの事件を思い出させ、いずれもが親に虐待されながらも親を慕う子どもの姿に心を動かされない人はいないのではないかと思われます。

「FNNプライムイブニング」ニュースは今回も特集し、「2018年の1年間に警察が児童虐待の疑いで児童相談所に通告した子どもの数は8万104人、この10年で約13倍にも増えている。」と報じました（「児童虐待の通告数が過去最高　10年で約13倍に…『面前DV』も」、2月7日放映）。このうち、約7割は面前DVで、兄弟が暴力を振るわれていたり、夫婦喧嘩だったり、親の間のDVを見て精神的なDVを受けているという結果でした。一方、2018年に摘発された児童虐待事案は、1,355件で、これは2008年に摘発された357件と比べると約3.8倍に増えています。また、『朝日新聞』は、厚生労働省が結愛さんの事件を受け行った緊急調査で、安全確認ができていない子どもは全国で2,936人、虐待を受けているか、虐待情報がある子どもは143人いたと報じています（『朝日新聞デジタル』2019年2月28日）。記事によれば、安全確認かができていなかった未就園児らは15,270人で、調査を進めてもなお安全確認ができていない子どもが2,936人（就学前2,480人、小学生263人、中学生147人など）いるということです。

人の子が人として生きていけるように

人間は生まれてから人間という社会で育っていきます。その社会的人的環境で人は保護され愛され学び、やがて自分という人を形成していきます。人にとって生育する環境・関係は大変に重要なものです。「児童福祉法」（2018年改正）の総則は、児童を健全に健康に育てていくために次のように記しています。

> 第一条　全て児童は、……適切に養育されること、その生活を保障されること、愛され、保護されること、その心身の健やかな成長及び発達並びにその自立が図られることその他の福祉を等しく保障される権利を有する。
>
> 第二条　全て国民は、児童が良好な環境において生まれ、…… 心身ともに健やかに育成されるよう努めなければならない。
>
> ○2　児童の保護者は、児童を心身ともに健やかに育成することについて第一義的責任を負う。
>
> ○3　国及び地方公共団体は、児童の保護者とともに、児童を心身ともに健やかに育成する責任を負う。

子どもの保護者は、子の生育・成長に「第一義的責任」を負うもので、その多くは「親」であり、その「親」は子を無条件に可愛がるものだと思われてきました。親による虐待の増加は、何を物語るのでしょう。心愛さんの事件を受け、政府は「児童虐待防止法」の改正案を作成、両親が行う「体罰」を禁止することを盛り込むと報じられています。連鎖すると言われるDVという現象は、夫婦・親子という非常に親密度の高い環境で発生します。個別の事件を掘り下げる、行政など社会的取り組みを再考する、夫婦・親子のあり方規範を直視するなど、様々なアプローチが必要でしょう。当事者だけの問題ではないはずです。

図書紹介（111）

『きりしたん受容史―教えと信仰と実践の諸相―』

（東馬場郁生著、教文館、2018 年）

おやさと研究所教授
金子　昭　*Akira Kaneko*

本書は、長年にわたる著者のきりしたん研究の結晶であり、教文館「キリシタン研究」シリーズの第 50 輯として刊行された記念すべき著作である。『ばうちずもの授けやう』と『おらしよの飜譯』表紙の口絵写真など、天理図書館の貴重な蔵書図版も掲載されている。

従来のきりしたん研究が伝道者や伝道組織（偉大な宣教師や修道会）に即したものが主だったのに対して、本書はきりしたん信仰を受容した側（一般の日本人信徒）に着目した“受け手のきりしたん史”の試みである。著者がひらがなで「きりしたん」と書く理由も、日本の宗教文化の中で人々がこの信仰を培ってきたあり方に寄り添うという意味がある。

こうした受容史の研究により、カトリック教会からすれば不純で逸脱した要素もまた、きりしたんの信仰表現として注目すべきものとなるのである。信徒たちは、十字架の印を切って水を浄め、この水を聖水として信仰治療に用いたり、災難除けのために十字架を描いて戸口に護符のように貼り付けたりしていた。このような受容の仕方は、象徴が持つ治癒と保護の力への信徒たちの期待を意味するものであった。（現世利益や信仰治療への期待は、当時のヨーロッパの民衆キリスト教においても同様であった。この習慣が日本にも持ち込まれたのではないかと考える研究者もいる。）

今日、カトリックと言えば、物分かりがよく寛容で、宗教間対話に熱心なイメージが強いが、そのような傾向は第２バチカン公会議以降のごく最近の事象に過ぎない。16 世紀後半のきりしたん伝道にあって、伝道の主たる担い手となったイエズス会は、当初その宗教的不寛容さにより、日本の宗教文化を否定し、仏像を焼き、寺社を破壊するという暴挙にも出ていたのだった。これに対して、宣教師ヴァリニャーノは、一神教的排他主義に拘泥せず、キリスト教を日本の実情に合わせて慎重に適応させようと努めた。ただし、彼の適用主義とて最終的には改宗が目的であり、自己を相対化して日本の宗教文化を評価したりするものでは決してなかった。

そのような適応主義は、キリスト教の内実を確保しつつ、目に見える表現は現実の習慣に順応させようとするもので、しばしば「実と殻」の譬えで表現される。しかし、受容する側にとっては、実と殻が別物だとは考えていない。例えば、数珠とロザリオが共存したり、受洗後に剃髪し出家したりということも起こる。だからと言って、そこに「仏教者か、キリスト教徒か」という近代的な二者択一主義を持ちこんでも、彼らの信仰を理解したことにはならないのである。

本書でとくに注目したい章は、第６章と第７章である。

第６章「日本の宗教文化における『きりしたんの教え』の意義」では、比較宗教思想的な視角として、キリスト教と浄土真宗の比較がなされている。この研究領域では従来、信仰のあり方や宗教的革新という側面に焦点を当てる形で、プロテスタントの思想家（ルターやキルケゴール）と、浄土真宗の宗祖の親鸞を対比させて、比較研究がなされてきた。これに対し、筆者はカトリック教会に基づくきりしたんと、本願寺教団中興の祖である蓮如とを対比させて論じる。この対比には意表をつく新鮮な印象を感じる。けれども、歴史的に同じ時空を共有し、当時の日本人にとって現実の信仰の選択肢となっていたという事実からすれば、両者の比較研究は実に的を得たものだと言えるだろう。

きりしたんの教えは、救済の場として「後生」を強調した。この死後救済の観念は、蓮如の『御文（おふみ）』にも見られるものだ。蓮如はまたその一方で、後生の救済を祈ることが今生の生活にも利益（りやく）をもたらすとも説いた。「後生善所」とともに「現世安穏」が蓮如の教えのポイントなのである。そして、きりしたんの側でも、まさにこの同じ仏教用語を用いて、不干斎ハビアンが同様な現世・後世二重の救済観を説いた。主たる相違は救済者が阿弥陀仏かデウスかという点に集中する。しかし、救済観としては重なり合う要素を持っているがゆえに、受容する側には両者の教えがダブって見えたことであろう。

第７章「きりしたんの儀礼」では、日本の宗教文化の中におけるきりしたんの存在を理解するために、その教義の内容だけでなく、実践の様態としての儀礼にも目を向ける。これを秘跡と捉えてしまうと神学上の議論になってしまうが、儀礼という用語を用いることで、広く文化的なコンテキストの中での検討が可能になるのである。

通常は司祭や助祭のみが授けることができる洗礼であるが、当時は司祭が不在であっても信徒が「ばうちずも」（洗礼）を授けることができた。それほどまでに、聖職者数に比して信者や信者になる者が多かったことが知られる。本章では、これ以外にも、「ぺにてんしや」（ゆるしの秘跡）やきりしたん式の葬儀について、具体的事例を交えながら説明を加えている。在来の民俗儀礼に適応しつつ、いかに自らの儀礼を浸透させていったかというきりしたん側の工夫を活写していて、とても興味深い。

受容する側に焦点を当てた研究姿勢は、きりしたんの歴史学的研究だけではなく、今日の伝道宗教の社会学的研究においても十分援用が可能であろう。天理教においても、日本の宗教文化とは異なるコンテキストを持つ国や地域に布教伝道がなされる場合、教えや信仰や実践が現地の信者たちにどのように受容されてきたのか、さらにはどう受容されるのが望ましいのかといった、異文化伝道の今日的課題にもつながってくる。そのような意味でも、本書はとても重要な示唆を与えてくれるように思う。

2018年度「教学と現代」報告

金子　昭

２月26日、天理大学研究棟第１会議室において「天理教のすべてが分かる事典を目指して―『天理教事典　第三版』刊行によせて―」というテーマの下、2018年度の特別講座「教学と現代」が開催された。教会本部月次祭終了後の時間帯とあって、多くの教友が参加した。

基調講演１として、佐藤浩司・天理大学名誉教授が「事典編集に40年間携わってきて」と題して発題。佐藤名誉教授は1977年に初版が刊行された時期から『天理教事典』の編集に携わり、この度の第三版にあたっては編集責任者を務めた。

佐藤名誉教授は、20年おきに事典を刊行してきた経過について、その苦労話やエピソードも含めて編集の変遷について語った。初版の『天理教事典』について言えば、その構想は、おやさと研究所が再編された1972年（昭和47年）の時、公共の図書館に置いてもらえる教内書籍を出版することを目指して出てきたという。会合を重ねる中で編集委員の陣容も決まり、事典編集は研究所の事業として進められた。当初約4,000項目の案が出されたが、毎週夜遅くまで会議を重ね、最終的には大中小の各項目をあわせて約1,200項目へと厳選され、執筆者も336名を超えた。

ただ、依頼はしてみたものの、なかなか原稿が出て来なかったり、また原稿が揃ってようやく組版を作っても、当時は写真植字による製版の時代であり、何度も繰り返される校正作業はとても骨の折れる作業となった。天理駅前のビル６階に一室を借りて、佐藤名誉教授は３か月缶詰状態になりながら作業を進めたという。1977年（昭和52年）の刊行は、天理大学創設者である中山正善２代真柱の十年祭にあわせてのものである。

1981年(昭和56年)より、編集中に問題になった事柄を考究し、改訂に備えるために、天理教学懇談会がもたれたが、これがやがて次なる編集会議につながっていくことになる。1989年（平成元年）、初版の中の直属教会、教区、海外伝道庁の各歴史の部分が、『改訂天理教事典　教会史篇』として独立して出版されるにいたった。そして大幅に新規項目を増やし、また教語の説明も充実させて、『改訂　天理教事典』を1997年（平成９年）に刊行し、この『改訂版』に基づいていっそう完璧を期して、2018年（平成30年）、『天理教事典　第三版』を刊行したのである。

基調講演２は、澤井治郎・おやさと研究所研究員による「３冊の『天理教事典』の内容の変遷」。これら３冊の事典の内容が、具体的にどのように移り変わってきたかについて、実際の事典項目に即して詳しく解説した。「初版」1,262の項目中243項目を占める直属教会名は、項目数としては約２割だが、比較的長文の項目が多く、分量としては半分を占めている。その一方で、原典の用語や教会本部の組織については、比較的簡潔な形で解説されていた。そのため、『教会史篇』を独立させた後の『改訂版』では、用語に関する項目が細分化されると同時に大幅に増補され、2,816項目が収録されることになった。特筆すべきは、全頁数の約６割が新たに執筆されており、さらに従来の項目もかなり書き直されたことである。組織的な活動についての増補とともに、三原典や教典、また稿本教祖伝及び逸話篇を読むために便利な言葉・事項が重点的に増補されている。そのため、『改訂版』は内容的には「新版」と称してもいいくらいの事典になった。

『第三版』の基本はこの『改訂版』であった。削られたり縮小されたりした項目や図版もあるが、全体で2,841項目が収録されている。また、全項目にわたって文章や内容の総点検が行われ、大半の項目に大小さまざまな修正が施された。とくに人権的な問題や天理教学の展開など、現代的な観点から従来の説明を修正・加筆したものが多い。そのほか、天理教内のさまざまな動きについても更新された。澤井研究員は、事典編纂・改訂の意義として、誤りなき天理教の理解に資するだけではなく、時代の流れに合わせて天理教全体の見直しにつながるものであることを強調した。

その後、「『天理教事典　第三版』の意義と今後の課題」と題したパネルディスカッションの部に入った。はじめに、堀内みどり主任（用語班代表）、佐藤名誉教授（歴史・人名・地名班代表）、森洋明研究員（組織・文化班代表）がそれぞれ担当した班の編集内容についてコメントした。

堀内主任は、最も時間をかけて検討したのがこの用語に関する部分であることを述べた。その際、新旧項目を選定し、既存の項目でも徹底した検討がなされた。とくに原典引用を増やすと同時に、その徹底的チェックもなされた。また、昨今の人権感覚に配慮して内容の検討が行われ、表記の見直しと統一がはかられた。

佐藤名誉教授は、現真柱についての新しい項目や逸話篇の登場人物の追加を行ったことを述べた。その際、地名を現在の表記とも対照させて確認し、生没年の表記についても統一がはかられた。また、年表についても『改訂版』以後20年間分が追加され、また全体にわたって本文との整合性がチェックされた。

森研究員は、天理教の組織が20年前と変わったことに鑑み、最新版の組織機構を掲載したことを述べた。森研究委員は、教内各部署との連絡調整を行うさいの難しさや、海外伝道における記述の濃淡の問題、また美術やスポーツなど幾つもの部署にまたがる領域への対応など、編集作業において苦労があったことに言及した。

このあとフロアを交えて質疑応答が行われた。天理教独自の言い表し方と世間一般のそれとの齟齬（そご）の問題、取り上げる人物をもっと広げるという可能性、また今後の方向性としてのウェブ版における課題などについて、さまざまな意見交換がなされた。

最後に「総括と展望」として、高見宇造所長が、このたびの『天理教事典　第三版』の意義について語った。事典の編纂は、おやさと研究所だからこそできたことである。このたび研究所の総力を挙げて編集・刊行したこの事典を、今後いっそう教内外の方々に読んでいただきたいと、高見所長は話を締めくくった。

キリスト大学国際会議に参加

堀内みどり

1月9日から12日にかけて開催された、インド・バンガロールにあるキリスト大学（Christ Deemed to be University）の創立50周年記念国際会議に出席し、発表した。

総合テーマは「ハーモニー」で、宇宙と宗教と倫理の調和を焦点とし、開会記念講演のほか、6つの基調講演があった。研究発表は7つのサブ・テーマに分かれ、合計129の発表があった。堀内は、「Harmony: Indian Perspectives」の部会で、「Religious Harmony: An Approach by Swami Vivekananda（宗教的調和：スワミ・ヴィヴェーカーナンダの方法）」と題し、ヴィヴェーカーナンダの「ユニヴァーサル・レリジョン（普遍宗教）」について発表した。1893年シカゴで行われた世界宗教会議で絶賛されたヴィヴェーカーナンダは、その後、請われてアメリカ・ヨーロッパ各地を講演旅行している。彼は、各々の宗教・宗派・教派はそれぞれ自分のテリトリーの中で自分が一番だと言い、他を批判するが、そのような諍いや争いを超える「普遍宗教」というあり方が重要だと言う。彼はヒンドゥー教に則り解説するが、今回の発表では、彼のその理想は現代社会でどのように展開されているのか、そもそも「普遍宗教」とはどう解されるのかについて再考した。

第319回研究報告会（2月21日）「アメリカ東部の天理教伝道―ニューヨークセンターの歴史と現状―」

尾上貴行

アメリカ本土の天理教伝道は、19世紀末から増加したアメリカへの日本人移民を追いかける形で、1920年代後半から組織的に開始された。そして天理教の教勢は戦前から現在に至るまで、日本人や日系アメリカ人が多く在住する西海岸に集中している。その一方で、戦後のアメリカ伝道の特徴の一つとして、中西部や北東部への伸展が挙げられる。本報告では、この中西部や北東部での伝道について、特に「天理教ニューヨークセンター」の歴史と活動を中心として概観した。

まず初めに1900年から現在に至るまでのアメリカ国勢調査のデータに基づき、日系人の人口分布の変遷を押さえた上で、天理教の戦前、戦後、そして現在の教勢を地図上に見ていった。このことから戦後にはイリノイ州やワシントンD.C.などにも教会が設立され、さらに現在ではニューヨーク、ジョージア、バージニア、ノースカロライナなどの各州にも教会や布教所があり、布教活動がより広範囲に展開している様子が確認された。

次に中西部や北東部での伝道の嚆矢と考えられる中山正善2代真柱の訪問について言及。2代真柱は生涯で1933年、1951年、1954年、1963年2回の合計5回訪米し、シカゴやニューヨークにも度々訪れ、領事館、日系企業、大学などの関係者と懇談している。1950年のウエストシカゴ教会設立を皮切りに、中西部や東北部に教会新設や移転が相次いだ。その背景には、戦時中抑留や強制収容された教信者たちが、当初西海岸に戻ることが許されなかったこともあり、他の同胞と共に新たな居住地をイリノイ州やニュージャージー州などに求めたことがあったこと、また当時の布教対象は転住した日系人やアメリカ人の軍人と結婚し渡米した女性たちであったことなどを述べた。

後半はニューヨークの伝道をまとめた。同地での布教活動が本格化するのは1960年代に入ってからであり、アメリカ伝道庁3代庁長をつとめた吉田進氏などの布教活動により、在住する教信者たちが寄り集い月次祭をつとめるようになった。同時期の日米関係改善、移民法改正、日系企業進出などから、新たに渡米し在住する日本人が徐々に増加していったことが、布教活動を活発にする要因ともなった。こうした中で、1971年に中山善衛3代真柱がニューヨークを来訪。これが契機となり、同地への拠点設置の機運がたかまり、1977年ニューヨーク州クイーンズ区に「天理教ニューヨークセンター」が設置された。その後の略史と現在の主な活動を紹介した後、対社会活動の大きな基点となっている「ニューヨーク天理文化協会」の活動に関しても言及した。

最後に、ニューヨークでの天理教伝道の基盤として、センター設立当初から諸活動に参画している教信者の存在、地域社会活動へ積極的な貢献、アメリカ社会との接点を目指す文化協会の存在、関係者一同が一丸となって行われた神殿ふしんなどがあるのではないかとの報告者の印象を述べた上で、次世代への信仰の伝承や非日系人への布教などが、今後も変わらぬ課題として挙げられるのではないかとして発表を締めくくった。

『グローカル天理』年間購読のご案内

原則的に新年度は1月号からとなっております。購読料については、送料のみの実費負担です。申し込みは、封書、FAX、メールでお願い致します（お電話での申し込みはご遠慮下さい）。毎月の希望冊数と、氏名（フリガナも）、郵便番号、住所、電話、FAX、E-Mail、職業をお知らせ下さい。申し込み受付後に振込み用紙を送付致します。切手・現金でのお支払いはご遠慮くださいますようお願い致します。振込みを確認後、発送させて頂きます。

送料（ヤマト運輸メール便）
全国一律、A4（角2）厚さ1cmまで（10冊まで）82円でお届けします。
11冊以降は164円になります。
【例】
毎月1～10冊購読　82円×12カ月＝984円
毎月11冊～ 購読　164円×12カ月＝1,968円

問い合わせ先：

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050
天理大学 おやさと研究所「グローカル天理」編集部
FAX 0743-63-7255
E-Mail: oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

「出前教学講座」申し込み受付

おやさと研究所では、「出前教学講座」についてのご依頼を受け付けております。どのようなことでも、気軽にご相談ください。お待ちしております。

詳細は、担当者佐藤孝則（電話:0743-63-8105、またはメール:tasato@sta.tenri-u.ac.jp）までお問い合わせ下さい。

天理大学附属おやさと研究所

2019 年度公開教学講座

信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ（5）

教祖のご在世当時、道の先人たちは教祖から直接聞いたお言葉をしっかりと心に治め、生涯、自ら信仰を生きる心の指針としました。そうした教祖の逸話は、世代を超えて語り伝えられ、お道の信仰の支えになっています。

この公開教学講座では、『稿本天理教教祖伝逸話篇』における教祖の逸話を手がかりとして、お道の信仰世界の一端を明らかにしたいと思います。

本講座は、2019 年 4 月から 11 月（7、8 月を除く）の毎月 25 日、午前 10 時から 11 時 30 分にかけて、道友社 6 階ホールで開催します。

4 月 25 日（木）	51「家の宝」	高見宇造
5 月 25 日（土）	70「麦かち」	金子　昭
6 月 25 日（火）	72「救かる身やもの」	澤井義次
9 月 25 日（水）	58「今日は、河内から」	尾上貴行
10 月 25 日（金）	71「あの雨の中を」	島田勝巳
11 月 25 日（月）	73「大護摩」	堀内みどり

事前予約不要
来聴無料

場所：天理教道友社 6 階ホール

時間：午前 10 時～ 11 時 30 分

＊お車でのご来場はご遠慮下さい。

グローカル天理
第 20 巻　第 4 号　（通巻 232 号）
2019（平成 31）年 4 月 1 日発行

ⓒ Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者　高見宇造
編集発行　天理大学 おやさと研究所
〒 632-8510　奈良県天理市杣之内町 1050
TEL　0743-63-9080
FAX　0743-63-7255
URL　https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm
E-mail　oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷　天理時報社
Printed in Japan